

税が守りぬく郷土の景色

稲沢市立稲沢西中学校3年 田中 紗来

私はこの夏、「絵になる町」の課題に最後の挑戦をしている。小学一年生の夏から毎年欠かさず取り組み、九年目となる。五月に家族で市内の名所をまわり、構図を考えて撮影し絵を描くのが恒例だった。美濃路街道沿いに住む私は、普段から古い町並みを当たり前に感じている。しかし、毎年「絵になる町」でこの場所を描く友人が多い事に気づいた。先日も小学生が古い町家を撮影していた。皆が「描きたい」と思う風景は、心ひかれる歴史の重みと人の手で守られてきた証が感じられるのだ。振り返ると、これまで私が描いてきた神社や仏閣、古い町家も市や県の文化財としての案内板があった事を思い出す。小学生の頃は、単純に美しい風景を正確に描く事に夢中だった。中学三年生になり歴史や公共について学ぶ中で「なぜ古い建物が今も残っているのか」「誰がどのように守っているのか」の視点を持ち、その答えが「税金」であると気づいた。何気なく通り過ぎていた看板や案内板、新しくなった側溝や歩道の石畳、LED街路灯の増設、これら全ては私の目に見える形の税であり、町中にあふれていた。

今、私が描く「中高記念館」は、稲沢市に現存する最古の近代洋風建築とされ、市の指定文化財である。建物を後世に残すために移設され保存修理がくり返された歴史的な建造物だ。調べてみると、中高記念館のような市指定の文化財の修復や管理には、市の一般財源の他、県や国の補助金が活用される。例えば、自治体が自由に使える地方交付税や公共施設の整備に充てられる社会資本整備総合交付金などがある。さらにふるさと納税の一部や住民税や固定資産税も含まれると知り、こうした様々な税が合わさり大切な文化財が未来へ受け継がれていると感動した。税が文化を守る力になっていて今を支え、未来にこの感動と価値を託すための仕組みなのだ。誰かが納めた税が、私の記憶になり絵となり、風景を守り続けている。このつながりを大切に確実に実行できる大人に私はならなくてははいけないと決意した。

描き上げた絵は、毎年荻須記念美術館に展示され表彰式も文化活動を称える場として丁寧に開いてもらえる。これもまた文化振興費という税があるのだ。私が九年間続けられたのは、絵を描く児童生徒を支える仕組みが市に根づいていて、これは税があるからこそ、郷土の魅力を再認識し探求する機会が与えられた。毎年描いた「絵になる町」は税の恩恵に気づいた私自身の成長記録になった。近い将来納税者となる。この気づきを忘れずに自分の郷土を考え関心を持ち続ける大人になりたい。税と市の未来も自分事として描き続けたい。未来のため正しく納税し、その使い道を見守る大人にならなくてははいけない。その為に、今は学びを止めず関心を深め続けたい。心をこめて、最後の一枚を描こう。